

「風和ぎ（かぜやわらぎ）」

岩手県立盛岡第四高等学校3年

兼平 怜奈

橙色のLEDが通路を照らしている。木目が肅然と明かりを跳ね返していた。正月のこの時期、旅館桂には多くの客が滞在していたが、夜の九時を過ぎると、通路は客の姿もまばらだ。カートにうず高く積まれた使用済みタオルは、じつと濡れて重い。中学生のころは高校生にもなれば、今は小さな私でも楽に運ぶことができると思っていた。だが、私の成長期はいつまでたっても訪れなかった。

体は小さいままでも五年目にもなればさすがに慣れてきて、それ自体に手間取ることはない。一階の洗濯機の置いてある部屋に運び、タオル、洗剤、柔軟剤を放り込み、スイッチを入れる。一時間ほどたったら、丁寧にしわを伸ばして干す。そうしたら、今日はもう風呂に入って寝るだけだ。

「ちょっとそこのキミ。そこの中学生。そこは旅館の人が入る場所だから勝手に入っちゃだめだよ」

手足が長くてすらっとした若い女性に、いきなり中学生と呼ばれる。さすがにムッとした。

「あの、私中学生じゃないです」

睨みながら告げると、彼女は心底驚いたような顔をした。ますます失礼な人だ。

「高校生です。私は旅館の関係者と言いますか、ここの娘なので」

「へえ、跡取り娘ってわけなんだ」

「べつにそういうわけでは」

人の嫌なところばかりつく人だ。ずけずけと最近気にしていることまで踏み込んでくる。

私が口を開きかけると、さらに彼女は矢継ぎ早に話し続ける。本当に失礼な人だ。

「え、ご兄弟がいるの」

「いません。そうじゃなくて、まだ旅館を継ぐかどうかは決まっていませんし」

彼女は眉を下げて私を見てきた。

「あー、ごめん。そうだったのね。あたしは佐藤紗月って言うんだけど、よかったらお詫びにちょっと付き合ってくれないかな」

「こんな夜にですか」

「まあまあ遠慮せず。ちょっとぐらいいいじゃない。年上の顔を立てるつもり

でき。それともなにか用でもあるの」

「ない、ですが」

断りたい。でも、詫びようとする人の心を無下にするのも忍びない。そしてなによりこの旅館のお客さまだ。

「……わかりました。お付き合い致します」

彼女はにんまりときれいな笑みをうかべた。

岩手の冬は寒い。歩き始めて、まだ五分ほどしかたっていないというのに手先がかじかんでいる。前に行く彼女の鼻先も赤く染まっているはずだ。彼女は旅館を出てからなにも話しかけてこない。知らない人と沈黙のまま歩き続けることに気まずさを覚える。

数分ほど歩いて、彼女は急に立ち止まるとおもむろにスマホを取り出す。続けて、うんうんとうなりながら、スマホを持ってぐるぐると回った。

「どこ行くつもりですか」

「んー、いいところかもよ」

答えにならない答えを口にしながらも、いまだ彼女はぐるぐるとしている。

「もしかして、神社ですか」

彼女はぱっと立ち止まった。

アプリを使っても道に迷うとは、この人は相当方向音痴みたいだ。

私はわざとらしくため息をついて歩き出す。神社に行くなら、アプリに示される道では遠回りになる。都会と違ってここは山の中だ。少し道は悪くなるが、山道を通ったほうが早い。

林を突っ切ろうとすると

「そこ行くの？ 地図にないし、なんか道に見えないし」

「舗装されたところだけが道ではないんです。いいから黙ってついてきて下さい」

道はちょっとした斜面にはなっているが地面が凍っているわけでもないし、雪もそれほど積もっていない。え、とか、う、とかどもる彼女を無視して歩き出すと、わからない場所に置いて行かれる不安のほうが勝ったのか、のっそりとした足音が聞こえてきた。

林の中にはたくさん桂の木が生えていて、枝が頭上を覆いつくしていた。枝が月明かりをさえぎって、道にさらに濃い影を作り出している。不気味さを感じ、早足で緩い斜面を通り抜ける。彼女もついてきているようだ。

波山神社は木々に囲まれていた。その自然の壁が明かりを妨げ、近づく足が重たくなる。私たち以外誰一人としておらず、薄暗くて気味が悪い。

境内の中で唯一本殿は明るかった。その空間だけぽっかりと木が生えていない。穴を通すように月の光が差し、白い雪がそれを反射している。思わず早足

になる。

こんな場所のどこがいいところなんだろう。

「とりあえずお参りしよ」

彼女は意気揚々と私を抜き去って、本殿に向かって走っていった。さっきまで黙りこくっていた人とは別人みたいだ。

私は慌てて追いかける。迷子の子供のようで、一人になるのは嫌だった。

彼女の隣に並び、お参りしようとしたところで財布を持ってきていないのに気づいた。これではお参りができない。どうしようかと突っ立っていると、彼女が小銭を投げる。賽銭箱に落ちて、ちゃりん、ちゃりんと甲高い音がした。

「ほら、一緒にやろ」

「あのお賽銭は」

キミのも投げたからとせつつかれるままに、二礼二拍手一礼をする。

「なにか願い事した？」

「宿が繁盛しますようにってだけです」

彼女はふーんと胡乱げな目を向けてきた。

「跡は継がないのに、願い事にはするんだ」

「継ぐ気がないってわけではないですよ、ただ……」

私は今まで誰にも言おうとしなかったことを話そうとしている。

なんで素性の知れない他人に、それも神社まで連れてきてなにがしたいのかよくわからない人に話したのだろう。ずかずかと人の事情に土足で突っ込んできて、失礼にもほどがあるんじゃないかと思う。だが、その失礼さというか、遠慮のなさというか、こちらの気持ちをいっさい考えないところがむしろ心地よかった。

「……決められた人生を歩んでるようで嫌なんです」

今まで喉の奥に刺さっていた小骨が取れた感じがした。

彼女はふーんとどうでもよさそうにつぶやく。そして、近くにあった段差に座り込んだ。膝の上に両手で頬杖をつき、空を見上げる。私はただそれを目で追いかけた。彼女の薄い頬が月明かりに照らされて白く見える。

このとき初めて満月であるのに気付いた。雲にさえぎられることのない月の光が、私たちを包み込んでいる。

高校二年生になり、自分の将来について考えたとき、私はなにがしたいのかよくわからなかった。二年生に上がったときのコース選択ではとりあえず進学コースを選んだ。だが、進学するのか、旅館を手伝うのか、全然考えてなかった。母にどっちでも選べるようにすればいいんじゃないと言われて、そうか、と選んだだけだ。

三年生に近づいてきて、周りの子たちの間で将来とか大学とかって話題がちらほら挙がるようになった。ふざけたり楽しそうにしている中にも真剣に考えているのが伝わってきて、私もそろそろ自分の進路を放置してはおけないなと思った。

ある日、隣の席の子にどうするのと尋ねてみた。

まだよくわかんないやと苦笑しながら答えてくれた。私だけじゃないとちょっとびり安心した。

しかし、その後が続いた「和泉ちゃんはおうちの旅館があるもんね」という言葉に私の中の時間が止まった。返事をしなきゃと思うのに、口は動かなかった。

もちろん、旅館を継ぐことは一つの選択肢だ。私は一人娘だったし、旅館だって大好きだ。代々受け継いできたことに誇りすら感じている。だから、いざれそうになると私自身も思っていなかったわけではない。

だけど、それが本当にしたいことなのだろうか。周りに継ぐと言われたから、そうすべきなんだと思っただけじゃないだろうか。もしかしたら、今まで言われた通りに決めて、動いて、自分で考えて選んだことなど一つもないのかもしれない。

私は自信が持てなくなった。これまでの自分に。これからの自分に。

決められた人生を歩んでいくのも嫌だ。後悔なんてしたくない。でも選んだこともなければ、選ぶ努力をしたこともない。

——私はなにをどうすればいいのかわからなくなった。

私と彼女の間には沈黙が広がっている。しかし、さっきまで気まずいと感じていたものが、今は溶けたみたいになくなっていった。

急に微動だにしなかった彼女がすらりとした腕を伸ばす。しなやかな猫を彷彿とさせた。例えばなんだけど、と話し始める。

あたしね、大学生なんだけどつい最近までなにしようとか決めてなかった。大学も内部進学のところ行けて親に言われて。流されて生きて、とりあえず面白そうなことしてた。友達と朝まで遊んだり、趣味に没頭したり、バイトに明け暮れてみたり。わからないだらけだったけど、やってるうちに嫌なこと、そうじゃないことの差がだんだんついてくるの。

「ま、つまりね。今は決められててもいいんじゃないかな。いつかこれだっと思えるまでさ」

「本当にいいんでしょうか。問題から目を背けてるみたいですよ」

「高校生なんてさー、わからないことだらけだって。自分の将来を決めるなんてフツーは無理。ちょっとくらいじっくり考えなあって。焦らなくていいんだよ」

少し鼻がツンとした。話したら声が震えてしまう気がして、そのまま押し黙る。

彼女ががばっと立ち上がった。

「寒い！ 早く帰ろ。なんでこんな時間に来たんだろう」

「紗月さんが連れてきたんじゃないですか」

「岩手の冬がこれほど寒いとは思わなかったの」

鼻先も耳も真っ赤にしていた。私も手の感覚が薄れてきている。手先に息を吹きかけて温めた。

「鳥居から帰りましょう。林の中は怖いので」

彼女はそだねと同意する。

鳥居のそばには四角い木箱が置いてあった。おみくじだ。今年はまだ引いていない。そう考えると、無性にしたくなった。

「引きたいの？」

木箱には蓋がしてある。

「また今度明るいときに来ます。そういえば、まだ名乗ってなかったですね。私、桂和泉です」

「和泉ちゃんか。かわいい名前だね」

今までなにを考えているのかわからない彼女に、私は初めて親しみを覚えた。

友達というには遠くて、他人というには近い。彼女との関係を言葉にするなら、どんなものだろうと思った。

客室の清掃は早さと正確性が求められる。チェックアウトからチェックインまでの間で、一部屋につき二十四分。洗面台に髪の毛が落ちているだけでもクレームが入るので、手を抜くことはいっさいできない。

ごーっと掃除機がうるなる。部屋の中で反響するうるさいはずのそれが耳を右から左へすり抜けていった。

私の頭は紗月さんのことでいっぱいだった。

彼女は出会ってきた人たちの誰とも同じではなかった。友達とも、先生とも、近所の人とも違って、不思議な人だった。決められててもいいなんて、今まで言われたことなどない。私は他人に言われたままの人生でいいのだろうか。もし母に話してみたら、なんと言うのだろうか。

唐突に甲高い音が鳴り響いた。ごみ捨てサインが出ている。ぐるぐるとした思考が一瞬で吹き飛んだ。まだ仕事は残っている。気持ちを切り替えるために、頭を振る。結った髪がぱさぱさと揺れた。

掃除道具を片付けていると、母に声をかけられた。

「和泉、今日は夜のお手伝いはしなくていいわ。最近はずっと手伝わせてたから、少し休みなさい」

「うん。あのね、今度さ」

去りかけていた母がゆっくりと振り返った。さっぱりとまとめた髪と色白の肌は清潔感を与えるが、疲れた表情を隠しきれていない。

「ごめん、なんでもないよ」

繁盛時で働き詰めの母に言葉を続けられなかった。

こんな風になにも言ってこない娘に、いつしか母はなにも聞いてこなくなった。私は余計に話せばいいことがわからなくなり、母も戸惑っていった。今日みたいに休みなさいと言うだけだった。

母が私を大切にしていないとは思わない。ただ、いつも忙しそうにしていた。邪魔にならないように、手がかからないようにすることが母のためだと自分に言い聞かせていた。

廊下の木目を数えながら歩いていると、細長い影が足元に映った。

「和泉ちゃんだ。手伝いお疲れ様。お姉さんがこれあげるね」

彼女から渡されたビニール袋にあんぱんが入っていた。近くの商店街で人気ある商品の一つだ。礼を告げて受け取ると、ずっしりとしたあんの重みが伝わってくる。

「ね、このあと暇？」

「特にやることはありませんが」

「また一緒にあの神社に行ってくれないかな」

午前中に行こうとしたら、道に迷っちゃったんだよねと照れ臭そうにはにかむ。私はあきれたように息をついてみせた。

「いいですよ。お駄賃も貰いましたし」

ビニール袋をちょっと上げて見せると、彼女は後ろ頭をかいた。

外は昨日より暖かった。雪は完全に溶けて、水たまりがあちこちにある。橙色に染まった空が反射して、きらきらとしていた。

神社に着く。夕日に照らされた鳥居の赤が濃く見えた。

「おみくじ引こうよ。おごるから」

「大丈夫です。私、お金持ってきました」

でも昨日のお詫びもちゃんとできてなかったしさと言われる。彼女が二人分の初穂料を入れた。おみくじの山に手を突っ込み、つかむ。彼女はまだおみくじの山をかき回していた。

「見た目は全部一緒ですからそんなことしても無駄ですって」

「悩んでる時間が楽しいんだよ」

やっていることはガキ臭いのに、大人びた横顔だった。

「これだ！　じゃあ、せーので開けよっか」

おみくじは中吉だった。商売は物の値変動あり、待ち人来る、願い事努力すべし。そしてピンクの招き猫が小袋に包まれていた。ピンクは縁結びだ。

紙の上に影が落ちる。彼女がのぞき込んでいた。

「同じのだ、嬉しい。和泉ちゃんもそう思わない？」

目を細めて招き猫を見つめている。私は彼女のことをますます不思議に思った。

「こんなことが嬉しいんですか」

「うん。だって、おみくじがこの出会いは運命だって言ってくれてるみたいじゃん」

「同じだったから、そう思うんじゃないですか」

「もしそうだったとしてもね、あたしの嬉しいは本当の気持ちだよ」

優しい声があたりに響いた。日が暮れかけていて、神社に人はいない。ただ一人夕日に照らされる彼女が別世界にいるように見えた。

「私、自信がないんです。他人に言われたから旅館を継ぎたいのかもって。そんな人生は嫌だし、自分の本当の気持ちもわからないし」

私はうつむいた。目から涙があふれてくる。彼女に見られるのが嫌で、上着の襟元を引っ張って顔を隠す。かっと体から熱がわいてきて、涙を止めたいのに止められない。どうしようもなくなって、しゃがみこんだ。

人が近づいてくる気配がした。背中に重み加わり、それが上から下へと流れていく。彼女の声がくぐもって聞こえてくる。

「大丈夫、いつかちゃんとわかる日がくるよ」

「だって、お母さんに迷惑、かけちゃう」

「それでいいんだよ。子供が大人に迷惑かけるのは当然だって」

のどが引きつって、うまく息ができない。押し付けた布に水分が吸い込まれ、冷たくなっていく。顔の熱はいつまでたっても引かない。

私はただ泣き続けた。もしかしたら生まれたときからずっと泣いていたのかもしれない。きっと、女子高生の皮を被った赤子だったのだ。だって止め方がわからない。

彼女はただそばに居続けてくれた。無理に泣き止まなくていいと言ってくれてるみたいだった。

それは彼女のどんな言葉よりも、私を温めてくれた。

日はすっかり落ち、あたりは暗くなっていた。冷たい風が頬をなでる。火照った顔がひりひりとした。

「すみません、紗月さん。私……」

「別にいいって。すっきりしたでしょ」

熱を持った身体が急激に冷えていって、思考も落ち着いていく。恥ずかしくて、彼女のほうをまともに向けなかった。田舎の山道に外灯は少ない。腫れぼったくなった顔を直接見られなくてよかった。

旅館に近づいてきて、視界が明るくなってくる。別れる前にと、彼女を呼び止めた。

「あの、ありがとうございます」

「それはいいんだけどさ。和泉ちゃん、このまま帰るつもりなの？」

「私の顔、そんなに酷いですか」

彼女は呼吸も置かずに肯定した。やっぱり失礼な人だ。

「じゃあさ、お願いしたいことがあるんだけど」

初めて会ったときと変わらないきれいな笑みをうかべた。

「一緒に温泉に入ってくれないかな。部屋のお風呂、思ってたより広いんだ」

「でも、お客さまと入るのは」

彼女はゆるゆると首を振って、手を差し出してきた。

「友達としてさ。旅館の娘と客じゃなく」

少し視線を上げた先に笑顔がある。彼女の瞳にも私の笑顔が映った。

「はい。喜んでお付き合いさせてもらいます」

私は彼女のほっそりとした手を握る。じんわりとぬくもりが広がり、私と彼女の体温が混ざっていった。

ぽつんと壁際にある明かりが暗闇を照らす。湯船から立つ煙と白い息が混ざって天井に上っていった。

「あー、きもちいい」

彼女が私の心情を代弁するように言った。

湯が足先から全身までしみわたり、ヒノキの香りが鼻孔をくすぐった。肩の力が抜けていくのがわかる。

「実はあたし、大きな風呂付の部屋に泊まるのが夢だったのね。就職活動が本格的に始まる前に叶えてやるって思ってさ。ここに來れて本当によかった」

「よくて当然ですよ。うちの温泉なんですから」

隣にいた彼女が私の顔をのぞいた。

「ねえ和泉ちゃん。それがさ、本当の気持ちなんじゃない」

「本当の、気持ち。……そっか」

彼女の言葉が心の内を満たしていく。満ちて、溶けて、すんなりとなじんでいった。



「私、嬉しいんですね」

「温泉に対する誇らしさっていうのかな。顔に出てたよ」

彼女は前を向いて、あごの下までつかる。

私は湯を両手で掬った。透明な液体はなにもさえぎらない。手のしわまで見通せる。

今まで濁っていて、見通せないものがあった。それが初めてくっきりと形をとった気がした。それがなんなのか、私にはまだわからない。でも、それでいいのだと思う。迷って、悩んで、決めることだから。焦らなくていいって教えてもらったから。

「紗月さん。ありがとうございます」

「いーのよ、お姉さんがしたかっただけなんだから」

彼女の耳にかけられていた髪がはらりと落ちた。数本の黒い糸が細い首に張り付く。首元が染まっているのは、きっと湯のせいだけではないだろう。

ちょろちょろと新しい湯が注がれる音がある。それは絶えることなく響いていた。

私は不思議だった。彼女が優しくしてくれるのはどうしてか。最初はただのお詫びだったはずだ。面白そうだからと、やっていただけなのだろう。けどそうではない。嫌じゃないから、やってみたいからなんだ。彼女は自分に正直なだけなのだ。

彼女は不思議な人などではなかった。私と同じように悩んでいる、私よりちょっと年上のお姉さんだ。

「当旅館をご利用いただきありがとうございます」

お客様をお見送りするのは初めてだった。玄関口に座り込み、三つ指をついて頭を下げる。まだ慣れない着物とひとつに結い上げた髪が気を引き締めた。

「若女将って感じだね。似合ってるよ」

彼女はきれいな笑みをうかべた。まっすぐに注がれる視線から、世辞ではなく正直な感想だとわかる。

「私、まだ悩むことにします。だから今やれることを一生懸命することにしました」

「そっか。いいと思うよ」

どこか投げやりな言葉が心地よく耳を通り抜けた。

「また来てください。友達として。もしかしたら女将として、歓迎します」

あんぱんもいいですけど、近くにおいしいコロッケを売ってるお肉屋さんがあるんです。連れてってあげますから、と付け加えた。彼女は頭をかいて、道に迷わなくて済むよと苦笑した。

「またのお越しをお待ちしております。気を付けてお帰りください」

深々と頭を下げた。

玄関には旅館に代々伝わる木彫りの招き猫がある。百年近くあるそれは元より濃いだろう焦げ茶色をして、台に鎮座している。

招き猫は多くの出会いと別れを見守ってきた。この出会いもその一つに過ぎない。だが、私は運命の出会いだって信じている。招き猫は福を呼び、人の縁を結んでくれるはずだから。

ゆっくりと頭を上げると、まだ冷たい風が優しく頬をなでてった。